

## 研究タイトル： 昭和戦前期の演劇運動における基礎的研究—村山知義を中心に—



氏名：	鴨川 都美 / KAMOGAWA Satomi	E-mail:	kamogawa@kurume-nct.ac.jp
職名：	准教授	学位：	博士（文学）
所属学会・協会：	日本演劇学会 / 日本近代文学会 / 日本社会文学会 / 昭和文学会 / 日本文学協会		
キーワード：	日本近現代演劇, プロレタリア文化運動, 現代の社会派演劇, 原爆文学, 日本近代文学, 自立演劇		
技術相談 提供可能技術：	昭和戦前期のプロレタリア文化運動における演劇研究		

## 研究内容： 昭和戦前期の演劇運動における基礎的研究—村山知義を中心に—

「演劇運動万歳！」ということばを遺して絶命した村山知義（1901～1977）は、76年の生涯のうち、50年近くを演劇運動に捧げている。

村山知義は、戦前のプロレタリア演劇運動の旗手であり、戦中においては社会主義リアリズムに傾倒し、日本の新劇界を率いる中心人物の一人であった。また、演劇界では装置家からスタートしたことからわかるように、その才能は美術、舞踏、戯曲、小説、評論と多岐に亘るものである。

美術、演劇、文学を横断的に奔走した村山知義研究の大半は、従来、1920年代前半の前衛的な芸術運動に絞られていた。プロレタリア演劇運動、1933年以降の一群の転向小説、終戦を迎えた朝鮮での活動等に関する研究も散見するが、その大部分は村山知義の断片を捉えているに過ぎない。なかでも、戦後の演劇運動についての研究は著しく停滞しているといえよう。今日、村山知義について研究することは、すなわち1920年代から1970年代にかけての日本文化史の一端を担う研究であると考えている。

だが、村山知義には生前自ら編集した『村山知義戯曲集』上下巻（新日本出版社、1971年）以外にはまとまった著作集が存在せず、戯曲・小説・評論等を網羅した全集は現在まで編纂されていない。そのため、1920年代前半の美術団体MAVOや心座で試みた前衛的な様式の美術・演劇研究を除いては研究が停滞しており、村山の全体像を捉えることが非常に困難な状況にある。

2000年以降、『仿書月刊』（2001年6月）、『水声通信』（2006年1月）で特集が生まれ、回顧展「すべての僕が沸騰する—村山知義の宇宙—」（神奈川県近代美術館他三都市巡回、2012年）が開催される等、近年、その注目度は徐々に高まってきている。なかでも、美術研究中心ではない、演劇・映画・小説等についての初の論集である岩本憲児編『村山知義 劇的尖端 メディアとパフォーマンスの20世紀①』（森話社、2012年）は、村山知義研究にとって画期的な一冊といえよう。

ただ、村山知義研究における第一義は演劇運動であると考え。「暴力団記」、「東洋車輛工場」、「志村夏江」といった一連のプロレタリア戯曲以外にも、戦後の演劇運動において村山知義の功績を認めることは十分可能であり、他の劇作家に与えた影響を明らかにすることも重要な意義を有している。

本研究では、戦前から戦後に至る演劇運動における基礎的研究を、戯曲の読解を中心に行うものである。具体的には、村山知義の演劇運動の礎となるプロレタリア演劇運動、戦中、戦後の朝鮮での活動、帰国後の鎌倉アカデミア等での活動を検証する。また、戦後に登場する自立演劇（職場演劇）の劇作家たちに対する日本共産党の宣伝芸術学校等での指導やその影響を、自立演劇出身の劇作家たちの戯曲を論証することで明らかにしようと試みる。また、戦後の村山の戯曲にも着目し、1950年代以降に発表された戯曲「死んだ海」三部作の考察を行い、村山知義が唱えた社会主義リアリズムである「発展的リアリズム」について研究している。

また、近年では村山の描く女性像が時代の先端と呼応しながら形成されていることにも関心があり、1970年代に発表された晩年期の戯曲と女性解放運動との関連についても研究を進めている。

## 提供可能な設備・機器：

名称・型番（メーカー）
